文化の話題

「フェルメール 真珠の耳飾りの少女展」
微細な動き描いて誘い込む

大阪中之島美術館　林　哲夫

〝見返り美少女〟に会ってきた。オランダ・ハーグで初めて対面したのは、はるか46年前のこと。このたびは完璧な化粧直しで本来の艶やかさを取り戻し、まさに目を奪われる思いである。その瞳、唇、白い襟元、耳飾り、そして青いターバンから黄色の垂れ布まで、わが目線はさまよい、肩口のところからまたもや瞳に吸い寄せられる。鼻先を滑ってふたたび唇、耳飾りへ……何度でも繰り返してしまう。見る悦び。

青いターバンは

この少女が日本にやって来たのは4度目である。1984年には「青いターバンの少女」と呼ばれ、2000年には「青いターバンの少女（真珠の耳飾りの少女）」と2題の併記であった。ところが女優スカーレット・ヨハンソンが絵の中から抜け出してきたようにこの少女を演じた映画「真珠の耳飾りの少女」が公開（2003）されるや、この絵のタイトルは「真珠の耳飾りの少女」と定まってしまったのである。

残念ながら彼女が付けているのは真珠の耳飾りではない。ここまで大きな真珠は、同時代の女性でいえばフランス王妃マリー・ド・メディシスか英国王女メアリー・ステュアートほどの身分でなければ付けられない、そのくらい希少なものだったはず。フェルメールがこの少女像に限らず他の作品でも描いている大ぶりの耳飾りはおそらくガラスか何かの模造品であろう。

一方「青いターバンの少女」の青いターバンには意味がある。当時のオランダにはこんなファッションはなかったそうだから、これは風俗の描写ではなく、彼女が特別な少女であることを示している。それはシビュラすなわちアポロンの神託を受ける古代の巫女ではないかという説が有力とされる。詳しくは本展図録の解説（宮下規久朗）に譲るとして、ただし、そうだとしても、絵にさまざまな寓意を持たせながら日常的な場面を作り出すのがフェルメールのやり方である。シビュラそのものではなくシビュラごっこと言っていいかもしれない。この少女はフェルメールの長女であっても、注文主の娘であっても、あるいは近所の女の子であってもいい、そんな親密さがあふれている。多くの人々に好まれる理由も一つはそこにあるのだろう。

空気感をかもす

フェルメールは空気の画家である。彼は何か意味のある主題や事物を描こうとしたのではなく（そういう作例もなくはないが）、基本的には故郷デルフトの澄明かつ濃密な空気を描きたかった。当然、ルネ・デカルトのエーテル（光が波動として伝搬するために必要な媒質）についての知識を持っていたと考えて不都合はない。エーテルで満たされた、見る者が同じ空間にスーッと迎え入れられるような仮想世界。そういう空気感を出したかったのであり、そのための効果的な手段が〈動き〉だということを画家は知っていた。少女が振り返る、真珠が揺れる、牛乳が滴る、天秤が微かに振れる、リュートを爪弾く、手紙を読む瞳や指先がわずかに動く。輪郭をくっきり描かない理由もそこにある。静止したポーズを写真のように切り取るのではなく、フェルメールはムービーを撮っている、極めて静かなワンシーンを。そしてそこへ観客を誘い込む。だからこそ少女は映画とともに飛躍的に人気が高まったのだろうし、それはまたスマホ動画の爆発的な普及と無関係ではないと思えてくるのだ。

本展ではマウリッツハイス美術館の改修を機にもたらされた少女を含む12点のオランダ絵画黄金時代の精髄を楽しむことができる。レンブラントやハルスの珍しい小品、テル・ボルフの「揺りかごの傍らで縫物をする女」は佳作。また付随展示としてフェルメール全作品の複製画が原寸大で一つの壁面に並べられたコーナーは非常に示唆に富んでいる。もし改修後に門外不出になってしまえば、今回が日本で少女に会える最後のチャンスである。

（はやし・てつお　画家・著述家・装幀家）

＊9月27日（日）まで。問い合わせ☎06（4301）7285（大阪市総合コールセンター）

ヨハネス・フェルメール《真珠の耳飾りの少女》1665年頃　油彩／カンヴァス　44.5×39ｃｍ　マウリッツハイス美術館　©Mauritshuis, The Hague

ヨハネス・フェルメール《ディアナとニンフたち》1653－1654年頃　油彩／カンヴァス　97.8×104.6ｃｍ　マウリッツハイス美術館　©Mauritshuis, The Hague

マウリッツハイス美術館　©Mauritshuis, The Hague

歩みきて

歌手・俳優
由紀　さおりさん
……第3話

「手紙」で日本レコード大賞歌唱賞

「夜明けのスキャット」のヒットと結婚が、時期的にダブっているんです。有名なCM音楽ディレクターだった彼と初めて出会ったのは中学3年生のころです。一回り年上だった彼は私の声を気に入ってくれて、いろんなCMソングに起用してくれました。私が大人の歌い手になりたいということも知っていて、一番似合う音楽はなんだろうということを一緒に探してくれた人です。

予想外のヒットと結婚と

§　§

高校3年のころ、「卒業したら結婚しよう」とプロポーズされて、私も「この人と結婚したい」と思ったんです。ところが、父に猛反対されて、「短大を卒業するまでは許さん」ということになっていました。「夜明けのスキャット」をつくってくださった、いずみ先生と彼はCMソングの世界ではライバル関係でしたから、「由紀さおり」としての再デビューを喜んでくれたかというと微妙だったんです。彼との結婚と「夜明けのスキャット」の発売は同じ3月でした。予想を超えるヒット曲になって、超多忙の私は家で過ごす時間はほとんどなく、物理的にも心の距離も広がる一方でした。結局、結婚して7年目ぐらいから別居生活で、その後離婚しました。

§　§

でも今、私が歌を歌うということの基軸になるものの考え方は、やはり最初に出会ったパートナーの影響が一番大きいと思います。

その頃は女性歌手の花盛りだったんです。でも、〝一発屋〟と呼ばれて、1曲だけで消えていく人たちも多くいました。ですから翌年、「手紙」が再びヒットした時には「これで何とかこの世界で生き延びていけるかもしれない」と思ったことを覚えています。「手紙」ではレコード大賞歌唱賞をいただいて、大きな自信につながりました。

§　§

ちょうどそのころ、ドリフターズの「8時だョ！全員集合」が始まったんですよね。テレビが本格的に影響力のある大きなメディアになっていく時代で、歌手もいろんな面を見せることが求められる時代の始まりでした。ですから私は、「8時だョ！全員集合」や「コメディーお江戸でござる」などのバラエティー番組にも積極的に出させていただきました。お芝居やコメディーは、小さいころから大好きでしたから。

「8時だョ！全員集合」には10年間、ずっと出演しました。現場のいかりや長介さんは、歌手としての私のイメージが壊れないように、コントの段取りをとてもよく考えてくださったんですよ。最後に水をかぶったり、汚れてしまうオチがあるときは、加藤茶さんや荒井注さんがやるみたいなことをすごく計算してくださっていました。

（聞き手　寺田忠生）

＊金曜日隔週掲載　次回は9月11日付

俳壇

佳句の条件

佳句―良い俳句とは何かという問いは俳人の最重要問題だ。現時点の筆者の答えは「驚きのある俳句」というものだ。驚きは広く捉え、描かれる景の意外性や発見などに加え、表現の巧さや新しさも含めている。作者の驚きが読者の驚きへと共有されるとき、佳句として承認される。驚きという視点は必ずしも派手な句を要請するわけではない。

一例を村上鞆彦『踏花』（ふらんす堂）に見いだしてみよう。多くの若手を含め俳人を惹きつける結社「南風」の主宰である鞆彦の俳句は繊細で精妙な句を通して驚きを共有しようとする。

流木に蝶の止まれる涅槃かな　鞆彦

手花火のいろの映れるけむりかな

拭いてやる子の水洟の砂まじり

木枯しにとぶたこ焼の花がつを

これらの作品は景の中の意外な発見をもとにする点で、比較的わかりやすい驚きを読者に伝える。一方で、次のような作品はより機微に富んだ驚きを描き出す。

捩花にすこしなめの雨がふる

夏蝶の踏みたる花のしづみけり

風花を仰ぐ頤細りけり

こんこん咳くうすきちひさき舌尖らせ

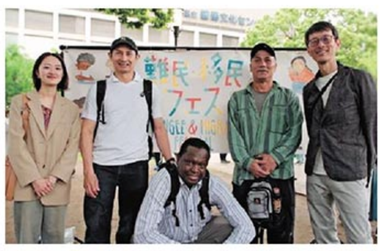
水の面の引き攣つてゐる氷かな

雨との対比で浮かぶ細く小さな捩花の生命力、上向く時の顎の皮膚の動作、咳する子の舌の形。眼前の機微を一見やすやすと我々に想像させる鞆彦の句作の技量に、読者は驚かされる。

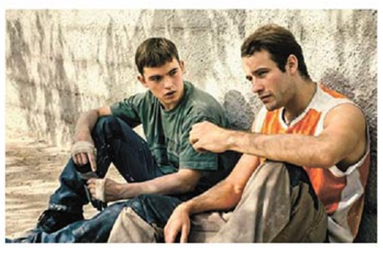
このように驚きを佳句の基準とすることは、俳句の詠（読）み方に一つの指針を与えるだろう。

（中西亮太・俳人）

映画



「ナウ・アンド・ゼン」（写真上）　日本の排外主義と、克服をめざす取り組みを追うドキュメンタリー。2023年、改悪入管法が成立。日本の非人道的な入管行政をさらに悪化させるもので、関東大震災時の朝鮮人虐殺から100年目のことでした。入管行政を告発し、難民支援に取り組む大学生は「（実態を）知った以上、黙ってはいられない」と。差別に反省がない政府に対し、声をあげる若い世代の姿は―。暗い現実と、確かにある希望。西原孝至監督。29日から東京・ユーロスペースほかで公開、順次全国で。



「君の見る世界をなぞる」（写真下）　フランス。裕福な家庭で育つものの、学校になじめず、建築見習いとして働く16歳のエンゾ（エロワ・ポユ）。そこで出会ったのは、ウクライナから出稼ぎに来ている青年ヴラド（マクシム・スリヴィンスキー）でした。仕事や遊びを教わり、ヴラドへの憧れを募らせてゆくエンゾ。しかし兵役のため、ヴラドは帰国することとなって―。さまよう心が見つけたものは。ロバン・カンピヨ監督。東京・ヒューマントラストシネマ有楽町ほかで公開中、順次全国で。

演劇

国立劇場提供

9月文楽鑑賞教室「二人三番叟」「解説文楽の魅力」「仮名手本忠臣蔵」（写真上）　9月10～20日、東京・江東区文化センター。☎0570（07）9900

歌恋プリス第1回公演「まほろば」（写真中）　作＝蓬莱竜太、演出＝加藤健一。とある田舎町の、村祭りの日。世代の異なる6人の女たちの物語。岸田國士戯曲賞受賞作。出演＝加藤忍、嶋村友美、尾身美詞、もりちえ、久我音寧、戸張柚。9月11～13日、東京・駅前劇場。☎080（9465）1031

座・高円寺レパートリーこどもたちのための舞台作品「夏の夜の夢」（写真下）　原作＝W・シェイクスピア、訳＝小田島雄志、上演台本＝岩崎う大、演出・作詞＝シライケイタ。アテネ、貴族の娘ハーミア。父の決めた結婚が嫌で愛する青年と夜の森へ駆け落ちします。森には妖精が待ち構えて…。出演＝山﨑薫、木ノ下藤吉ほか。舞台手話通訳＝田中結夏。9月13日～10月17日、東京・座・高円寺1。☎03（3223）7300

梁丞佑撮影

音楽

第48回童謡祭　9月6日午後2時半、東京・板橋区立文化会館大ホール。歌＝雨宮知子、稲村なおこ、川口京子、塩野美子、土屋朱帆、西山琴恵、古瀬ゆうき、渡辺かおり。合唱団のこどもたち＝クラウン少女合唱団、多摩ファミリーシンガーズ。ピアノ＝上雅子、河野春美、篠崎仁美、はせがわふさこ、森若三栄子。☎03（3263）5766（日本童謡協会）

テアトロ・レアル公演より　©Javier del Real ― Teatro Real

ジョアキーノ・ロッシーニ　オペラ「イタリアのトルコ人」（新制作）（写真）　10月2、4、7、10、12日、東京・新国立劇場。指揮＝アレッサンドロ・ボナート。演出・衣装＝ロラン・ペリー。出演＝アレハンドロ・バリニャス・ビエイテス、クラウディア・ムスキオ、パオロ・ボルドーニャ、ルジル・ガティンほか。合唱＝新国立劇場合唱団。管弦楽＝東京フィルハーモニー交響楽団。共同制作＝テアトロ・レアル、リヨン歌劇場。☎03（5352）9999（新国立劇場ボックスオフィス）

第39回岸本力バス・リサイタル　アレクサンドル・プーシキンと古きロシア・ロマンス　9月18日午後2時、旧東京音楽学校奏楽堂。出演＝岸本力（バス）、村上弦一郎（ピアノ）、北村聡（バンドネオン）、森山太（朗読）。☎03（3796）1831（二期会チケットセンター）

美術

司修「猫町　次の瞬間」

司修展　宮沢賢治の作品と萩原朔太郎「猫町」を中心に（写真上）　9月1～13日。画家、作家、装丁家。賢治の童話の挿絵や絵本の制作をライフワークとして、言葉から生まれるイメージを絵画に表現してきました。賢治の文学作品と朔太郎の幻想的な小説を題材に水彩やパステルで描いた新作などを展示します。ギャラリーヒルゲート　京都市中京区寺町通三条上ル天性寺前町535☎075（231）3702

上野駅の地下鉄入り口の高い障壁の上で、ウオークマンを聴いている男（台東区、1982年）

小松健一作品展「都会の安息―1970～1980年代」（写真下）　9月1～27日。新聞記者を経てフリーランスの写真家として活動。高度経済成長からバブル経済へと移行する約50年前の東京を記録した写真60点（すべてモノクロ）を展示します。占い師に行列をつくる人々、塾帰りに夜の電車で勉強する子どもなど、都会で孤独を抱えて生きる人々を見つめています。JCII フォトサロン　東京都千代田区一番町25番地JCIIビル☎03（3261）0300